

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

(例) 野呂松人形《のろまにんぎょう》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 江戸|和泉太夫《いずみだゆう》

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(例) そうありたい[ # 「ありたい」に傍点 ]ばかりでなく、

[ ]：アクセント分解された欧文をかこむ

(例) 日本の[ e'tiquette ]も、

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照してください

[http://aozora.gr.jp/accent\\_separation.html](http://aozora.gr.jp/accent_separation.html)

-----

野呂松人形《のろまにんぎょう》を使うから、見に来ないかと言う招待が突然来た。招待してくれたのは、知らない人である。が、文面で、その人が、僕の友人の知人だと言う事がわかった。「K氏も御出《おいで》の事と存じ候えば」とか何とか、書いてある。Kが、僕の友人である事は言うまでもない。僕は、ともかくも、招待に応ずる事にした。

野呂松人形と言うものが、どんなものかと言う事は、その日になって、Kの説明を聞くまでは、僕もよく知らなかった。その後、世事談《せじだん》を見ると、のろまは「江戸|和泉太夫《いずみだゆう》、芝居に野呂松勘兵衛《のろまつかんべえ》と云うもの、頭ひらたく色青黒きいやしげなる人形を使う。これをのろま人形と云う。野呂松の略語なり」とある。昔は蔵前《くらまえ》の札差《ふださし》とか諸大名の御金御用とかあるいはまたは長袖とかが、楽しみに使ったものだそうだが、今では、これを使う人も数えるほどしかないらしい。

当日、僕は車で、その催しがある日暮里《にっぽり》のある人の別荘へ行った。二月の末のある曇った日の夕方である。日の暮には、まだ間《ま》があるので、光とも影ともつかない明るさが、往来に漂《ただよ》っている。木の芽を誘うには早すぎるが、空気は、湿気を含んで、どこことなく暖い。二三ヶ所で問うて、漸《ようや》く、見つけた家は、人通りの少ない横町にあった。が、想像したほど、閑静《かんせい》な住居《すまい》でもないらしい。昔通りのくぐり門をはいって、幅の狭い御影石《みかげいし》の石だたみを、玄関の前へ来ると、ここには、式台の柱に、銅鑼《どら》が一つ下っている。そばに、手ごろな朱塗《しゅぬり》の棒まで添えてあるから、これで叩くのかなと思っていると、まだ、それを手にしない中《うち》に、玄関の障子《しょうじ》のかげにいた人が、「どうぞこちらへ」と声をかけた。

受附のような所で、罫紙《けいし》の帳面に名前を書いて、奥へ通ると、玄関の次の八畳と六畳と、二間一しょにした、うす暗い座敷には、もう大分、客の数が見えていた。僕は、人中《ひとなか》へ出る時は、大抵、洋服を着てゆく。袴《はかま》だと、拘泥《こうでい》しなければならない。繁雑な日本の[ e'tiquette ]も、ズボンだと、しばしば、大目に見られやすい。僕のような、礼節になれない人間には、至極便利である。その日も、こう云う訳で、僕は、大学の制服を着て行った。が、ここへ来ている連中の中には、一人も洋服を着ているものがない。驚いた事には、僕の知っている英吉利人《イギリスじん》さえ、紋附《もんつき》にセルの袴で、扇《おうぎ》を前に控えている。Kの如き町家の子弟が結城紬《ゆうきつむぎ》の二枚襲《にまいがさね》か何かで、納まっていたのは言うまでもない。僕は、この二人の友人に挨拶をして、座につく時に、いささか、[ e'ranger ]の感があった。

「これだけ、お客があつては、さんも大よろこびだろう。」Kが僕に云った。さんと云うのは、僕に招待状をくれた人の名である。

「あの人も、やはり人形を使うのかい。」

「うん、一番か二番は、習っているそうだ。」

「今日も使うかしら。」

「いや、使わないだろう。今日は、これでもこの道のお歴々《れきれき》が使うのだから。」

Kは、それから、いろいろ、野呂松人形の話をした。何でも、番組の数は、皆で七十何番とかあって、それに使う人形が二十幾つとかあると云うような事である。自分は、時々、六畳の座敷の正面に出来ている舞台の方を

眺めながら、ぼんやりKの説明を聞いていた。

舞台と云うのは、高さ三尺ばかり、幅二間ばかりの金箔《きんぱく》を押した歩衝《ついたて》である。Kの説によると、これを「手摺《てす》り」と称するので、いつでも取壊せるように出来ていると云う。その左右へは、新しい三色緞子《さんしょくどんす》の几帳《きちょう》が下っている。後《うしろ》は、金屏風《きんびょうぶ》をたてまわしたものらしい。うす暗い中に、その歩衝《ついたて》と屏風との金が一重《ひとえ》、燦《いぶ》しをかけたように、重々しく夕闇を破っている。僕は、この簡素な舞台を見て非常にいい心もちがした。

「人形には、男と女とあってね、男には、青頭とか、文字兵衛《もじべえ》とか、十内《じゅうない》とか、老僧とか云うのがある。」Kは弁じて倦まない。

「女にもいろいろありますか。」と英吉利人《イギリスじん》が云った。

「女には、朝日とか、照日《てるひ》とかね、それからおきね、悪婆《あくば》なんぞと云うのもあるそうだ。もっとも中で有名なのは、青頭でね。これは、元祖から、今の宗家へ伝来したのだと云うが……」

生憎《あいにく》、その内に、僕は小用《こよう》に行きたくなった。

廁《かわや》から帰って見ると、もう電燈がついている。そうして、いつの間にか「手摺り」の後《うしろ》には、黒い紗《しゃ》の覆面をした人が一人、人形を持って立っている。

いよいよ、狂言が始まったのであろう。僕は、会釈《えしゃく》をしながら、ほかの客の間を通過して、前に坐っていた所へ来て坐った。Kと日本服を来た英吉利人との間である。

舞台の人形は、藍色の素袍《すおう》に、立烏帽子《たてえぼし》をかけた大名である。「それがし、いまだ、誇る宝がござらぬによって、世に稀《まれ》なる宝を都へ求めにやろうと存ずる。」人形を使っている人が、こんな事を云った。語と云い、口調と云い、間狂言《あいきょうげん》を見るのと、大した変りはない。

やがて、大名が、「まず、与六《よろく》を呼び出して申しつけよう。やいやい与六あるか。」とか何とか云うと、「へえ」と答えながらもう一人、黒い紗で顔を隠した人が、太郎冠者《たろうかじゃ》のような人形を持って、左の三色緞子の中から、出て来た。これは、茶色の半上下《はんがみしも》に、無腰《むごし》と云う着附けである。

すると、大名の人形が、左手《ゆんで》を小さ刀《がたな》の柄《つか》にかけながら、右手《めて》の中啓《ちゅうけい》で、与六をさしまねいで、こう云う事を云いつける。「天下治まり、目出度い御代なれば、かなたこなたにて宝合せをせらるるところ、なんじの知る通り、それがし方には、いまだ誇るべき宝がないによって、汝都へ上り、世に稀なところの宝が有らば求めて参れ。」与六「へえ」大名「急げ」「へえ」「ええ」「へえ」「ええ」「へえさてさて殿様には……」それから与六の長い Soliloque が始まった。

人形の出来は、はなはだ、簡単である。第一、着附の下に、足と云うものがない。口が開《あ》いたり、目が動いたりする後世の人形に比べれば、格段な相違である。手の指を動かす事はあるが、それも滅多《めった》にやらない。するのは、ただ身ぶりである。体を前後にまげたり、手を左右に動かしたりする。それよりほかには、何もしない。はなはだ、間ののびた、同時に、どこか鷹揚《おうよう》な、品のいいものである。僕は、人形に対して、再び、[e'tranger] の感を深くした。

アナトール・フランスの書いたものに、こう云う一節がある、時代と場所との制限を離れた美は、どこにもない。自分が、ある芸術の作品を悦ぶのは、その作品の生活に対する関係を、自分が発見した時に限るのである。Hissarlik の素焼の陶器は自分をして、よりイリアッドを愛せしめる。十三世紀におけるフィレンツェの生活を知らなかったとしたら、自分は神曲を、今日《こんにち》の如く鑑賞する事は出来なかったのに相違ない。自分は云う、あらゆる芸術の作品は、その製作の場所と時代とを知って、始めて、正當に愛し、かつ、理解し得られるのである。……

僕は、金色《こんじき》の背景の前に、悠長な動作を繰返している、藍の素袍《すおう》と茶の半上下《はんがみしも》とを見て、図《はか》らず、この一節を思い出した。僕たちの書いている小説も、いつかこの野呂松人形のようになる時が来はしないだろうか。僕たちは、時代と場所との制限をうけない美があると信じたがっている。僕たちのためにも、僕たちの尊敬する芸術家のためにも、そう信じて疑いたくないと思っている。しかし、それが、果して、そうありがたい[ # 「ありがたい」に傍点 ] ばかりでなく、そうある[ # 「ある」に傍点 ] 事であろうか。……

野呂松人形は、そうある[ # 「ある」に傍点 ] 事を否定する如く、木彫の白い顔を、金の歩衝《ついたて》の上で、動かしているのである。

狂言は、それから、すっぱ[ # 「すっぱ」に傍点 ] が出来て、与六を欺《だま》し、与六が帰って、大名の不興《ふきょう》を蒙《こうむ》る所で完《おわ》った。鳴物は、三味線のない芝居の囃《はや》しと能の囃しとを、一つにしたようなものである。

僕は、次の狂言を待つ間を、Kとも話さずに、ぼんやり、独り「朝日」をのんですごした。

[ # 地から1字上げ ] (大正五年七月十八日)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。